

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

内村鑑三先生書問三

一九〇六年
明治三十九年

謹賀新年

明治卅九年一月一日

内村鑑三

陸中、花巻川口、
有并、宗三郎様
花巻教友會
成中



新華社

本啓陸少生儀十四日江来芳
熱因^治なる一居り何論言直考あり
匠街の^治療に言け居り共我亦を癩
すも^治なる神のみに治せ、此際諸
君如く生るるに熱病を惜まれはる事な
倫に沃る。一月十九日禱中を口傳。

本啓は懇切なる湯熱問に預り、御見成
謝候、小生病狀下の由には度一
ツ利より昔熱し他を困して下らざる
ソたりて平温を得しかるて十日間に治り
一其いまだ何等の毒動、世一因却れ去り、
一医師に於て、病除の毒、若し治り、
此之病名のは熱病を類し、此は必す、
疾一、はは復共し、二十三日、廿五日、

陸中、花巻川原
 高家宗二郎様
 花巻教友會諸君
 由村鑑三

存啓は懇切ある所慰問に預り御威
 謝候、小生病狀下の由には度々
 夕刻より暑熱し夜を過して下らるる
 ことあり平温に復しかつて十日ほど
 共にまだ何等の憂鬱もせず因却
 病を治すに病源の若くは若くは
 此之病源の法想禱を願ひ候と
 候し、此法想禱を願ひ候と

陸中花巻川



高後宗二郎棟

内丹散



お啓

法電復並は是方開き候し

諸君の法句情病める心候

の度々徹し感涙を以て

病の床を治し申し

余を平生持て諸君の

為めとらるゝ何事をも亦

とぞ我らも 諸君共から

坊合に於てよりある 特別

の恩を表せられ 余を

神に向つて感謝する

因はる 諸君の向に深く

恥づるまふは能はず

疾をせしめし 病を癒

すを治す 天の福音を

角之落居。須ら家か
たつと落居。報甲らま
あらんとや。

二三日ぶより病勢が少し

くえぢけたる兆候あり、

死がしき及熱々依れしと

いつららず。死し病のちけ

割命をせさせよ。夜にカ

とたえざら。幸みにて中実

ある妻の枕ぼしあゑれず

命をいんぎん。二日看護す

るあり、おめいよ、**鬼**の

病禱の中よりあるあつて天の

筆光を示すあり、**小生**

今日**境**過な凍と不

幸あるものよ、**お**

此及びは法あ非にり、

大は法禱の、**お**

お

お

一月廿九、**病禱**の、

内、**お**

お、**お**

但稱がたうふむはるき
我守ふし之生はるの族の
の海津持く結ぶるよの海津
のいづれに比しはる病勢疾
の衰ふるは親^親の心から
のまわりをたははるし其
何れもしはる夜房のたよ
あのをらふはの若くは
しはる相とちしはる
かくはるを命に保つる
書を快の程はあつた
づらふしはるしはる
うがはるしはるしはる

〒
三十九番
一三九七九

陸中、花巻、川口
青藤宗一郎様

明治三十九年一月十九日

内村鑑三
新希塾社

東京府豊島区新栄町
字新巻百〇番地

青藤宗一郎様

当地研究會より
先君法被の事
其のり 依りて
一官有安部

科殿、小生今回の病
氣に就ては清地清兄姉の
一通りまらざる清配慮を
蒙り清る子道何とも清
礼の申上デヤう無二二ヤ小生

と清君の新樽、清君の
と今日は自筆を以て此書
状とシ差上げらるるに
御安心と云ふが、但、奉
復まじは尚ほ四五用
かあといふ、たは、
たは、清君、早

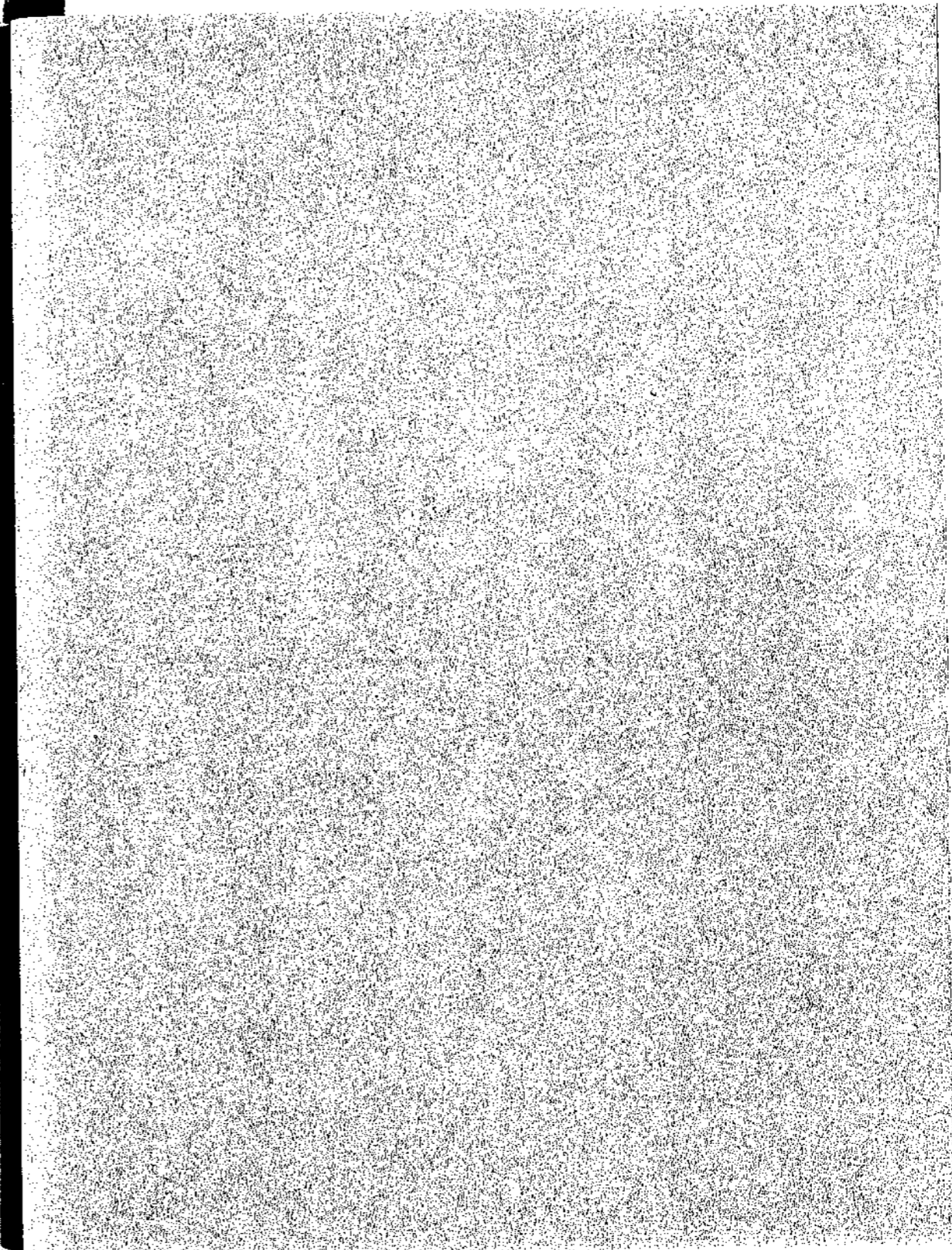
二月十日

鑑三

宗三郎

外

花巻清見



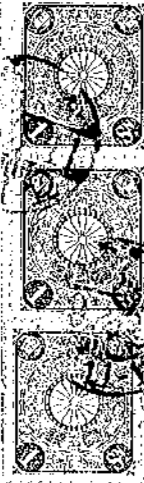
二月十日

内村鑑三

新華堂社

陸中花巻

齋藤宗二郎様



拜啓、陸は昨朝新六君清浄法門
と下清届物并に金六円正に廿後手
仕り、イッモまがりの清浄切又さる事と清
礼申上り、君の清眼病に就て聞き清
推言申上る。然かし書を讀むは、か信
仰上進の途に無之り、我等は直に神より
教えらぬと云へからむ。是れがためには、病と云は

時には甚だ有益に決るなり。
照井君、ツナ子其他二尊と預り、お生々死
人にてえに置り申す。此か、尚ほ二三週同遊
お積りに決るなり。百合根は大好物の清
彦、其個は又花とて咲かせる積りに
決るなり。神、貴、家とせしめり。終て人、ア、リ、シ

清彦君

三月八日

鑑三

三月八日

内村鑑三

陸中、花巻、川口町
齋藤宗二郎様

貴酬



神醫、清眼病終に手術を

施すの止むを得ざるに至りし。

由、サツカシ清眼術の功あり。

なる。然れども是れがたの新法に

新眼術を加へらば、さへ大に

同情板之みの區域が擴
のらした信だの、神に清感
謝をさすべし

清に瘡中何か清厨の有り
之かや清序にすし清知くぬ
とらなり、一生は毎日中夜其の

だのに新の中すべし早々

三月廿四日

鑑三

文南を為見

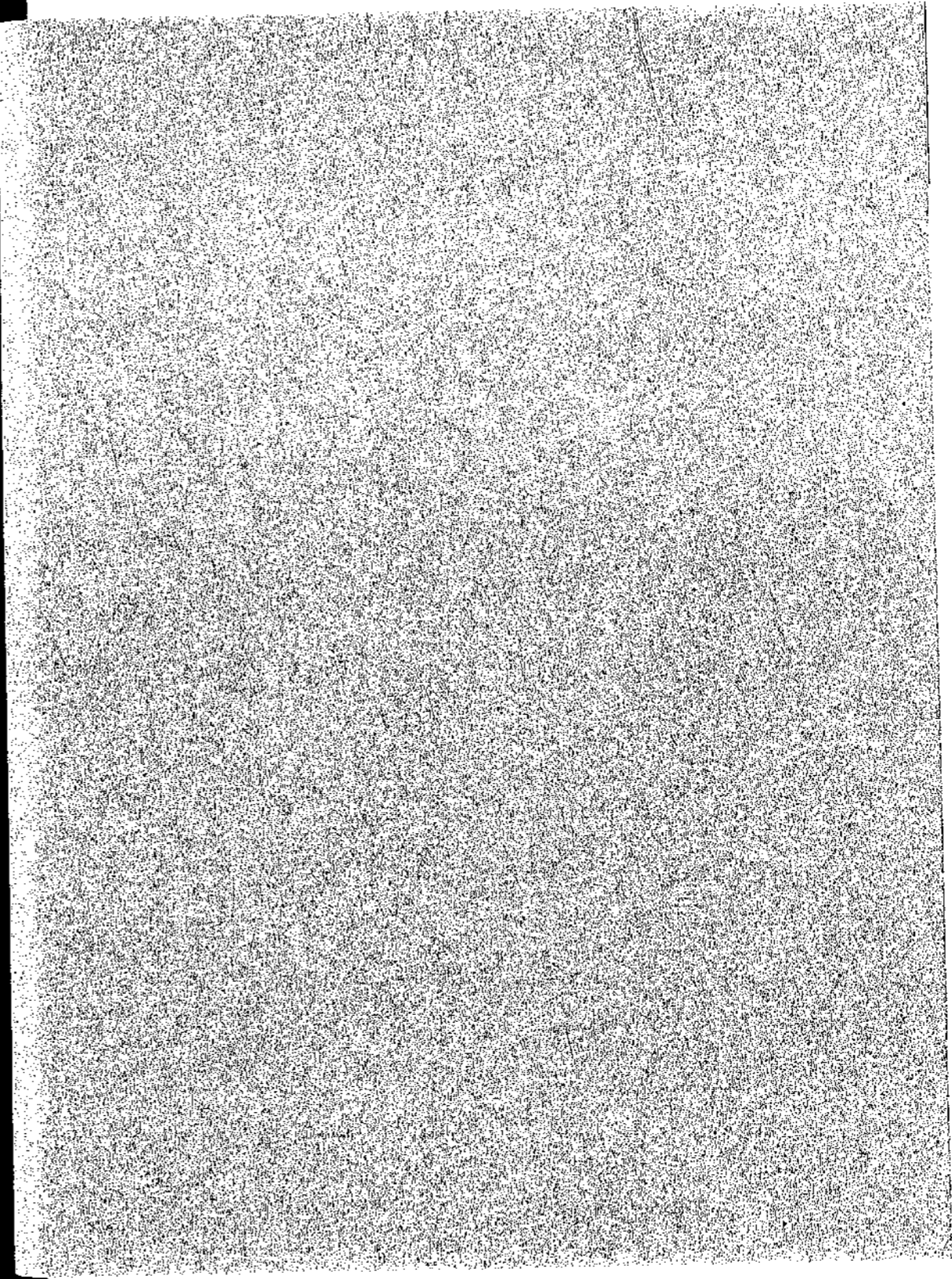
三月廿四日

内村鑑三

仙台市國分町二十丁目江馬方
斎藤宗次郎様



貴酬



4-gatsu 20 ka
1906.

Aisuru Saito Kun,
Go-zenkai, go-Kitaku no yoshi,
taikei ni zanjimasu. Sono go o-ka-
warinaki Kototo zanjimasu. Kondo
Seidai ni Kyōjūkwai ga okorima-
shita. O-tsuide ga araba, go-
buntō wo wasutte kudasai. Kan-
wa shimonō tori desu.

仙台市清水小路, 5
本郷方 宮崎傳治

Karera wa subete seinen desu,
shikashi mina neshin no yō ni
mukerare masu.

Watakushi mo hotondo zenkai
desu. Yamai no cameni zasshi
wa 200 bu hodo berimasita. Kono
nochiwa issō seisho-teki ni suru-
tsumoride aimasu.

Irai wa Romaji de go-bun-
tsū wa itajimasu. Kore ga bun-
mei no moujide aimasu. Suko-
shi narereba yasashiku yome
masu.

Shokun ye yoroshiku.

Kangō Uchinoura.

陸奥花巻

南藤宗三郎様

力付



神啓、其後清全快と奉存あり。

小生近頃頻りに清地の六とも思出は。

昨年清恵送つる合花艸は春に連

れて芽を出し、今年は花巻にユリが十株

程、三角笠に花を持つてあり。

別紙の如きもの陸奥の極北より考らり

い、足あり 照井君より一筆慰書
の言 清送り 願者、小生、小遠からず
東北の地を一巡廻致したと新りに居らん
清君、宜しく早々

四月廿六日

鑑三

斎田為足

予、宿す、本紙は高橋
新君に贈る、上調

わが尊敬する内村先生

不肖 神を信じてより、すくに

三星夜相、只おそ方、お貴の信

仰、厚弱に、信徒とす

その本分をつし、能はざることを

先生、私は今も、昔も、

師範学校を卒業して、今は

澄美郡と先生及び諸先生の
高岩とをありてあり、また太平
峰も恐山も甘地万有比のわが
友では居ります
終に先生の健康を祈る

喜多野物り此郡

大畑お植あす

高橋新三郎

内お先生

四月廿五日

内村鑑三

新書社

陸中、花巻川口町

文田藤宗二 印様

手信



特復、清書面正ニ、特淡

仕リカ、清書入の、為替正

に、清書仕カ、

今、飯佐、為氏、退社する

こと、に、相成り、(氏は、実業界に

入り、人、まこと、を、知、す) 就、こ、は、高、か、

の間、事務は少生と専らと老

人と三人に教す種りは清

斯くあるに其を置く種りは清

度、新くあるに其を置く種りは清地方書、店、新くあるに其を置く種りは清登送

と中康堂に委ねしと金

之がたのに清度か、小生も少

位には書頭の代理と教すも

反に利益とある、ペンダスト

この申せし通り「傳道師は

すべこの職業、と申す、職夫、バ、

missionary must be a jack of all trades.

此不信者國に在て独立傳

道と致すは其位の事と云ふ

然と存る。

其内に少し旅費が溜りらば、
東北地方支人の出^{送向}掛け申す
べから、今度の事務方変更のた
め大分出費掛り此目的を直
に実行する能はざるに在りしを
悲し申す。

諸足婦ノ直と法傳ノ取上
ハ、殊ガコソナリト直ト取上ガ、

彼女ノ直トは少キと荆吉セト
向ニ屢々淡柄ト申すコト出
申ハ、目下

五月五日

内村

斎藤

花巻二百金花巻人ど十

株程勢能く榮生

ハムラト缺本あり依こ適

宜取まぜ六包便と以て榮生

致し百津承取とたふ早

五月五日

内村鑑三

陸中花巻川口町

文相藤宗二郎様

貴酬

8.
三十二号
五月七号

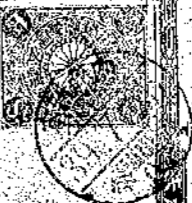


神陸 此ノノ馬ノ良マニ有難
奉有

神差し許し玉は、生未月二日一乗
車に出発致し、左山に高
崎登は午前八時五十分相成り、
独逸人ガシテ、別、四ノ支人、同
行致し、此に付、由、又、に、
市部全に相成り、一、先、東、
市出で、相成り、如何にや、
一同ニキヤカに、生、
は、清、勤、の、品、申、
余、は、清、面、

七月廿五日

陸中花卷川所
南藤宗三郎
肉桂三



肉桂三



拜啓、清無一事清淨
宅の由大慶に有る、
小生等は小諸一泊十
四日に帰宅をせり、家
に帰ると一御体サス
有る、慶賀三日より骨

肉の兄弟其の極悪
の迫言をなまじり、柏崎
に在りては愛より感の謝
とつた泣き言いしに、角
竹を以て帰りにては肉の弟
輩より親殺し、弟殺

しあまの母を殺し、
肉を

夫れに付けても天国とて

コイントラブル

世との反照と思ひながら

悪魔は教友会つ

効能を怒り、此みに

降し、此妨言とて生

かあまといふ、特々此

際か生のためには清新と
下やう願上り

清恩之寵花巻を教支
全諸員共に其の家
庭の上の豊かにしてらん
ちとぞ新りよん早ら

八月廿四日

鑑三

宗二あ君

八月廿四日

内村銀三郎

陸中花卷(山口町)

南藤宗二郎様

貴所

其後清きまのまきと
なる、さう方も暴川一先
づ吹去り今は至こ平穩
に清き、然し何時又
始まるや、知れ申さず、
彼等はキリストのため

に又と殺さぬはあらざと
申居りり、奇態ある信
者も有る者に清なる、
物伺りたまは清地同
志の中に小生その下婢
として奉公する事とて御ま

ひ者有る事か、日下居

る者は千葉の縣海保

君より書はしり者にかえ

共来る十月限り帰

家仕さべく、依てアキと

生じらに付き、今度のみ花巻

より清送りて、清はづかした

幸福に清き者、尤も
勞働を好む者によらば
少困り申は月給は二
円差出申は肉體
は健全なる者にして、
は十七歳以上二十歳以

下、少くも二年間奉公し
得る者、さすむるべし

右清らざる有るは、清
知らせむとて、
知らせむとて、

今日、
行仕るべし

今日、
今日、佐藤昌藏公卿

来流、聖書と花巻
とのちよに就て深きか
諸君へ宜しく法傳へ
りつたふ日なり

九月十四日

鑑三

音海見

九月十四日

由村鑑三

陸中花巻郡山口町

斎藤宗二郎様



拜啓陳者今般又々角管ハム
ツレトカ八度行致候ニ存別
便ヲ以テ少々進呈仕候間專
道用として然るべく御使用被下
度備に願上候 早々

九月十五日

拜啓陳者今般又々角管ハム
ツレトカ八度行致候ニ存別
便ヲ以テ少々進呈仕候間專
道用として然るべく御使用被下
度備に願上候 早々

信州へ申遣はさるる候事
は信州へ申遣はさるる候事

陸中花巻川口町
齊藤宗二郎様



内村鑑三

特啓 清瑞書 只今様見付
の下 喉のちと、恙し目下 清心
より 無三は、清面倒あから至
急 清知とせ 急上か、当方下女 遠
からず 固元へ 帰る事とて 代り至
急 見附せば 相成らず、法地は、
は 信州へ 申遣はさるる、
た 別紙に 存す

陸中花巻川口町

斎藤宗三郎様



内村鑑三

ウサ子奉養あるも彼女の母の
歡誼と得ての事に後したくか
母に迫り無理に事あるやうのやうにま
特復下女の事にかま
色々清心配と裁け
忍縮の至りになる
ウサ子はまことに結構に

清きか、先年の事事も有
まらぬ可相成とて、
つたかたなる、但しそれにして
も左の件々、馬と承知の
上にてこの事事に致したる事あり、

一、当方に於ては、人々の知見
之目、重き美言の事々に就ては

えんものほきとは、致さるる事あり

共、下女たる者の職分は、

婦の下に従ひ、先づ第一に

基所、第二に針仕事等の

事と為すに有之り、故に

水仕事はツマラナイの

修業の時同が、此の事あり

と云ふや、且つ連も勤まり
不申が、~~母~~当方に於ては月
下の慶保三月すまき七十五
女の老人あり、田外に小供
二人あり、来客ありと、目下
千葉縣より参り居りか
下女の如きは朝四時より

本寺の御供養の時同

とは少しも無之次第に
清き、彼女も教友会
員にはかえり、下女として
扱ひ居りか、ワサ子に於ても
今回来りてありか同じ
労働を爲し同じ扱ひを
受くるとは、世見物有と云ふ

の、詩人的の考へを以ては
下女奉公は出来不申（其書）の事
馬く承知置きを改まされ

二、少くも二年向は午職に
居ちの決りを持たぬたか

の女子着し考へとすれが来

月二十日頃には考へりおたるねな

宜しく清筆を、今が今母の
許と向ちの必要は無二なり、

荆まのじならくも心配す

はとほつ女子が果このト、女

の奴隷的の任に堪ぬるは

不吉に清筆を、今日まこの

経験に由らば少くも母の

(実は低き)理想をと抱く者
は下女といふは甚だな事なり
に清きもの、少年と荆事すが
ツサ子に就て心配するは唯
一事に清きもの、若し彼女
が某一等の下女と成り
得るものに低く(実は高き人)
成りに成るれば、ちまはまは
りとは氏もやよき事なり、清
きもの、
男の信まともなるに書し
からず清きもの、ちまはまはまは

九月廿四日夜

内村鑑三

香梅山房

九月廿四日

内村鑑三

陸中花巻川口町

斎藤宗二郎

持啓陳の直の横の甘子は念の
来りたての空まじりや至る事
清知らせと下たふ多分さうとは
なれ共、第一をまは他の方
と隔せぬは相向ふ事、清中教
とて清教道報赤澤の夜

陸中、花卷川所

南床室印様



内付書三

清書正に落。尚平、ツサ
子と云。差支あま由大
慶に存る。然るは廿二日
頃上あちろやう清傳ノ
と下たふ。

当方よりは毎月貳円

給金とし支給せるべく
に但し来る時の旅費あり
支方持ちのちこく致したく
り此の夜^よ衣持^ぎを考致し
是れ^お相方^あの好都合
とゆふ。大なる方に下敷^{した}敷^えは
有之か。余まり且しまの
は無之り。
斯く成りまうらも押理か
被^かなる。尚は清^{きよ}の上^{うへ}に
祝^{いわ}福^{ふく}を祈^{いの}り。早^{はや}々

十月十日夜

鑑三

齋藤 友

西仲のサ子之妻母より生
つて書は差遣しかば以後
来のたの非常な立しきかと
あり。

十月十日

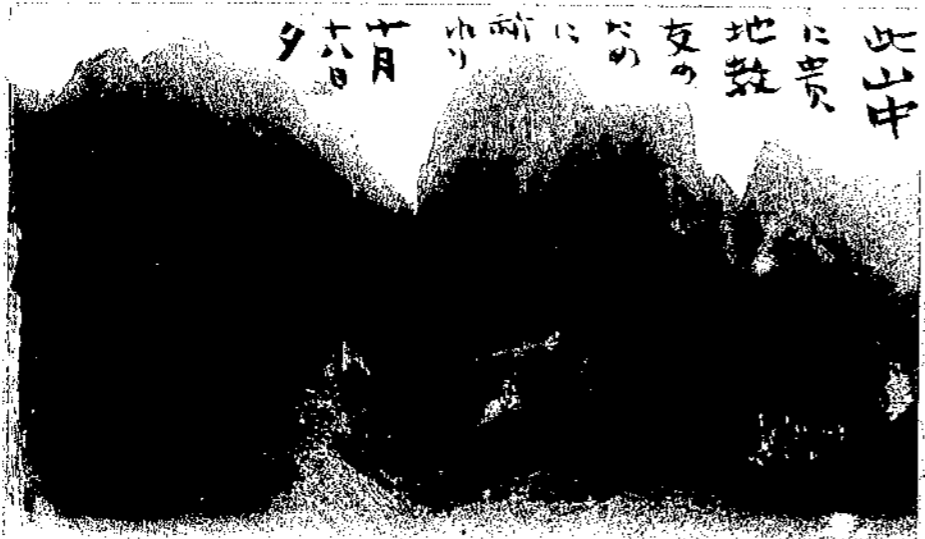
内村 鑑三

東京府立総合資料館
宇野浩二先生蔵書
昭和五十七年九月
内村鑑三

陸中、花巻川口町

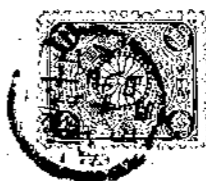
文用藤宗二郎様





此山中
に貴
地鼓
友の
所は
夕月

山景の夕月



きかは郵便

陸中花巻川口所

森戸藤宗三郎



上州妙義町三ツ

本村鑑三郎

UNION POSTALE UNIVERSELLE
UNION POSTALE

特勝の隙はツサ子
只今着着致しりる
清安心と下たふり
尚ほ結構ありき

澤山に清送り上
有難奉りた。清
地同志清君の口方と
も直しく清傳の上
たより。四十五

十月廿二日午三

九時

内村鑑三

齋藤兄

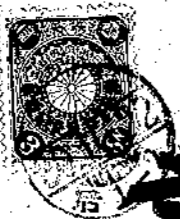
十月廿一日

内村鑑三

東京府豊島区豊島本町
字角持町二丁目
聖書研究社

陸中、花巻川口町

南藤宗二郎様



親展

特啓、陳は●ツサ子
思ふの外様子直しく
一同喜び居りし事
清女心よりたぐひ、彼女
の品性に此二三年間
に大變化したる事をも

返の申り、既に^る家にも
大分相慣れらるる年度
は、永く存せらるる事と
存た、此旨清彦の節
彼女の妻家の清彦
知下せし報也、

且又申上り、彼等の餘
りたらしく清彦紙又出
しがきを清彦はしよる方
宜しと存る、其理由は
当二方にナツカしころは成
るべく、夫れ故郷と存ら
しむる様、彼と女は相成
らざり、今日まで

白米駿致し小毒故不
要清原知頼上小早

十月二日

内村鑑三

齋藤兄

十一月二日

内村鑑三

東京府豊島区郷土博物館
字角館
聖徳太子廟
元住

陸中、花巻川口町

齋藤宗二郎様

親展





特啓 只今より暫く大段の
傳道に先づりて貴地諸教
友が新構を以て出来と伴
い至りて下さる候上は、
十一月
中六廿廿八の三日甲午
十三年朝

陸中、花巻、三戸町

齋藤白三郎様

郵便、法、力、天



東京府世田谷区神宮寺

字、角、百、〇、七、五、九

聖書研究社

内村鑑三

東京府世田谷区

神宮寺



郵は優



陸中、花巻川口町

齋藤宗二郎様



東京府豊多摩郡研究社
宇和野町
和書研究社

CARD POST
内村鑑三

クリスマスを加えす

又々清贈品、案に懸

かり有難と奉存ら、案

に戴くはがらにし何共

此縮の至り、
皆様

心へ傳へる傳へる

ひ

ガ子其後異状なく

身軀は肉附と甚だ

健全に見受の用事

は能く辨じたまふ口

餘りな懐きの精神

富むかたのためか人ナツキ

悪く常々沈黙する

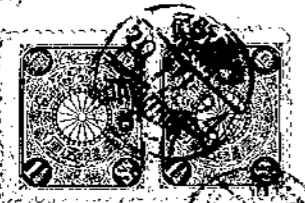
り同齡の女子来る

交際も致さず側が

見と何にか不平にもある

は入年とて起致し時

二は平生の注意を待たし
玉座の喉へいへくと返す事
さう片に別々になり申
それには困る或いは彼
女の性来の言質かとも
なむに思ふ。少しく他と
善にせんとすら行為に
先づはよしむぬが神の
居るに方とも甚した困難
とある。由るえよむと清
浄の印ら然法教の
たまふ。
明日にあらせむと命を精に
そまはに法をみる



陸中花巻川口町

斎藤三郎様

貴酬

12-24

内村鑑三

東京府豊多摩郡大島町
宇野宮町0番地
聖書研究社

十二月廿四日

鑑三

斎藤三郎

